

明治末期から大正初期にかけての『大阪時事新報』史

大阪芸術大学短期大学部 メディア・芸術学科 教授 松尾理也

福澤諭吉が1882（明治15）年に創刊した『時事新報』は、明治後期から大正初期にかけて「日本一の時事新報」のキャッチコピーで知られる通り、首都における高級紙として全盛を誇ったが、その後没落し1936（昭和11）年に休刊となったこともあって、その研究はほとんど進んでいない。さらに見落とされているのが、『時事』が関西への進出を図って1905（明治38）年に創刊した『大阪時事新報』である。大阪を発祥の地とする『朝日新聞』『毎日新聞』に対抗し、一時は関西の第三極としての立場をうかがった『大阪時事』は、『朝毎』を頂点とする「勝者の視点」からのみ語られがちな日本の新聞史を相対化するための貴重な存在であるが、これまでほとんど研究されてこなかった。

本年の研究では、この忘れ去られた新聞の意義を再発見し、新聞史全体の中に再定位するための指標の役割を果たす存在として、『大阪時事新報』で1924（大正13）年から1930（昭和5）年まで主筆を務めた土屋元作（大夢）というジャーナリストにスポットをあてた。土屋は、福澤諭吉の高弟であり、1899（明治32）年、脳出血で倒れた福澤が、みずからの思想を体系化し後世に残すことを意図し編纂を命じた「修身要領」の起草者でもあった。

土屋は1866（慶応2）年、大分生まれ。1893（明治26）年に渡米、日本美術品の輸出などいくつかの事業に従事したがいずれもうまくゆかず、1897（明治30）年に帰朝。『時事新報』に入社した。1901（明治34）年には『大阪毎日新聞』入社。さらに1904（明治37）年には38歳で『大阪朝日』入社。1905（明治38）年、日露戦争での旅順攻防戦で降伏し長崎に送られてきた敗将ステッセルの取材のため長崎に特派され、その後北京特派員に任ぜられるなど活躍している。

1915（大正4）年には『朝日』も退社するが、人望はあった。現在のアサヒビールの前身朝日麦酒の社長を務めビール王と呼ばれた山本為三郎とは昵懇の仲であった。

土屋は1924（大正13）年8月、招かれて『大阪時事』に入社する。主筆の役目としてまず想定されるのは社説の執筆だが、加えて土屋は「大夢」の号でコラムを書き続けた。入社早々から「空電」のタイトルで執筆を開始。1926（大正15）年には「遠雷」、1927（昭和2）年には「掴雲」、さらに「青い雲」「鳩笛」とタイトルを変えながら、ほぼ毎日1本のペースで執筆を続けた。土屋のコラムの特徴は、テーマが多岐にわたっていることである。ニュースは社会的に構築されるものであるというのが現代的な認識であるとするれば、土屋はそんなことはおかまいなしに自分の好きなことを好きなように書くタイプのコラムニストだった。1924（大正13）年に『大阪朝日』『大阪毎日』

がともに部数100万を超え、ニュースが大衆社会と密接に結びつくようになって、同時にニュースのあり方も読者側のまなざしによって規定されるようになった。ところが、土屋はそうした言説空間に無頓着であった。まさに独立不羈であるが、政党からの独立不羈はともかく、大衆社会からの独立不羈を標榜することは、時代遅れとの烙印を押されるのに等しい所業であった。

そのあたりは、本人自身が自覚していたようで、1930（昭和5）年3月15日付『大阪時事』（創刊25周年記念特集号）の社説欄に、「新聞というは難しき仕事で、石河幹明氏もいわれる如く、余り世間に迎合してもならず、又余り世間を白眼に見ても、俗世界と懸隔してもならず、我々の不詳ほとんど進退に窮する場合もある。幸い我時事新報には、福澤先生という大本尊があり、先生の遺徳を奉じ、先生の遺言に叱咤鞭撻せられて、大過なく此難しき仕事を果たす事を得るという次第」と書いている。

こうしたやり取りをみれば、土屋が在社していた当時の『大阪時事新報』は、福澤精神の数少ない砦とみなされていたことがわかる。ただし、福澤精神といえども、時代の荒波の外側にあつて平穩でいるわけにはいかなかった。大衆社会の到来で、企業化を進める『朝日』『毎日』の二大紙の前に、『大阪時事』の経営は低空飛行を続けるしかなく、それははいよいよ昭和に入つて危機的状況を迎えた。東京の『時事新報』自体の経営が悪化したことから、『大阪時事』は昭和5年、本体との経営を切り離し、『神戸新聞』傘下に吸収されるのである。

土屋は辞めるに当たって、「今回持ち主が変わったから辞めることにした。持ち主が変わっても辞めなくて良いじゃないかという人もあるが、宗旨が違つては、一寸具合が悪い。謡一つ謡うにしても観世と宝生では一緒にやれぬ」と述べている。ここから推察するならば、あたらしく経営を引き受けた神戸新聞社側から引導を渡されたというよりは、土屋自身、自らが福澤精神を受け継ぐ象徴的存在として招かれたことを自覚していたからこそ、経営が東京の時事新報社を離れる時点で身を引いたのだと考えられる。

つまり、土屋が『大阪時事新報』主筆として期待され、果たした役割は、福澤精神の守護者としての役割であり、経営母体が神戸新聞に代わった際、福澤精神なるものは、たとえ看板としては引き続き掲げられていたとしても、本質的にはその必要性を失ったのであった。逆に言えば、土屋在社時の『大阪時事新報』は、時代の激変の中で失われつつあつた福澤精神の最後のアジールでもあつたのである。